

豊明希望チャペル礼拝

2026/10/11

「恐れなくて信じなさい」

ルカの福音書 8 : 40～56

今日のところは、会堂司ヤイロの娘と、12 年長血を患った女の癒やしの記事です。

マタイの福音書、マルコの福音書、そして、このルカの福音書の 3 つの福音書に共通して記録されている出来事です。あまり注目をしなくても良いかもしれませんが、目をひくのは、この二人の女性が癒されたことが同時に語られるところと、とりわけヤイロの娘 12 才(くらい)と、12 年の長血を患った女の 12 年が重なるということです。しかし、このことを特に報告しているのは、マルコとルカで、マタイの福音書では、ヤイロの娘の年齢は書いてありません。もう少し詳細に比較すると、マルコの福音書では、娘の年齢に言及する箇所でこう書きます。一応触れておきますと・・・

マルコの福音書 5:42 すると、少女はすぐに起き上がり、歩き始めた。**彼女は十二歳であった。それを見るや、人々は口もきけないほどに驚いた。」**

12 年長血を患った女の人の癒やしの後、このヤイロの娘の癒やしの報告をして、最後に、12 才であったと意味ありげに、少女の年齢をあかすのは、マルコの年齢へのこだわりだと思われます。おそらく、そこに神の摂理、神の計画を見ているからでしょう。

その点、ルカは、こう書きます。

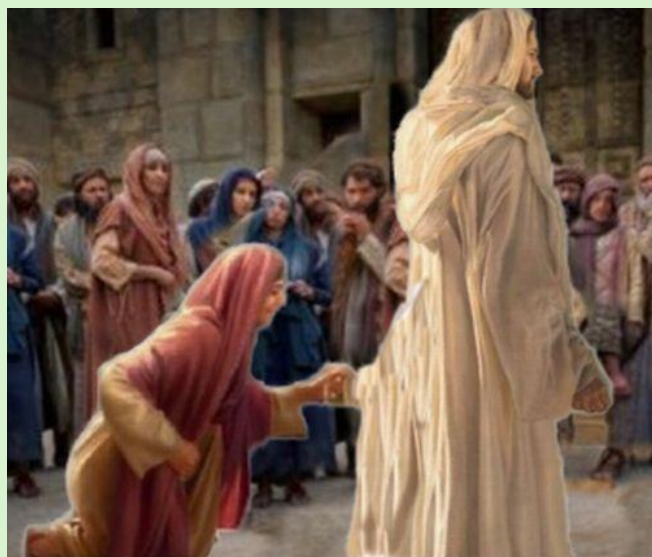
ルカの福音書「8:42 彼には**十二歳ぐらいの一人娘**がいて、死にかけていたのであった。それでイエスが出かけられると、群衆はイエスに押し迫って来た。」

むしろ、「12 歳ぐらい」と書いて、マルコより年齢をボカして、むしろ、ルカが注目しているのが、「一人娘」だったということにあるように見えます。この一人娘という点はマルコもマタイも告げていません。

どうでしょう。併せて考えるときに、ルカは、マルコの言うように、神の摂理などよりも、父親が、娘をしかも一人娘だったその子を亡くしたのだという、父娘(ちちこ)の心に寄り添っているように感じます。

そして、それは、もちろん、ルカが寄り添っているということではなく、イエス様が、この父に、そして、娘に、そして、同時に登場する長血を患った女に、いかに寄り添っていて下さるか、悲しみ、痛みを理解し、寄り添っていて下さるかに、私は焦点を当てたいと言っているように感じます。それで、私たちも今朝、続けて、そのイエス様の視点、イエス様をしっかりと見ながら、何が起きたかを味わっていきしたいと思います。黙想をしながら、二人セットでこそ意味をなす箇所ではありますが、ルカの視点で、ここは、二人の女性をわけて、黙想しましょう。

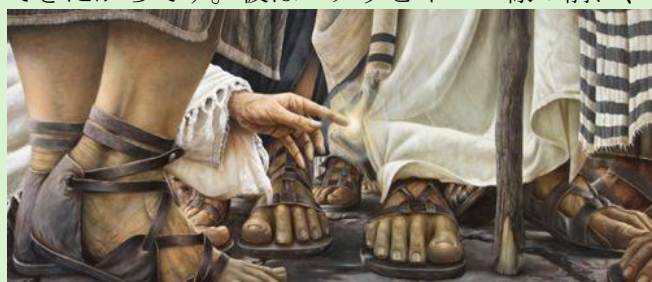
長血を患った女「8:43 そこに、十二年の間、長血をわずらい、医者たちに財産すべてを費やしたのに、だれにも治してもらえなかった女の人があった。8:44 彼女はイエスのうしろから近づいて、その衣の房に触れた。すると、ただちに出血が止まった。8:45 イエスは、「わたしにさわったのは、だれですか」と言われた。



みな自分ではないと言ったので、ペテロは、「先生。大勢の人たちが、あなたを囲んで押し合っています」と言った。8:46 しかし、イエスは言われた。「だれかがわたしにさわりました。わたし自身、自分から力が出て行くのを感じました。」8:47 彼女は隠しきれないと知って、震えながら進み出て御前にひれ伏し、イエスにさわった理由と、ただちに癒やされた次第を、すべての民の前で話した。8:48 イエス

は彼女に言われた。「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。」

イエス様が、ガリラヤ湖の対岸のゲラサ人の地で、悪霊に憑かれた男を癒した後、舟でユダヤに帰ってきますと、待っていましたとばかり多くの群衆が押し寄せていました。皆が我先にとイエス様にせまっている中、人々は、いささか、遠慮がちに道をあけました。その地域ではもっとも尊敬されているユダヤ教の会堂司がやってきたからです。彼はパタッとイエス様の前に、ひれ伏し、彼にとっては一人だけ



のその一人娘が死にそうだと言いました(このことはこの後黙想しますが・・・)。その時でした。皆がどいてくれたおかげで、やっとイエス様に近づけるとばかりに、なりふり構わず、ベースボールのホームへのヘッドスラ

イディングの如くに、イエス様の足にタッチと割り込んできた女でした。

43 節に長血を患った女と出てきます。何か婦人病の一種だと思います。当時、子供を産まない女は離縁してもいいと考えられていいとさえ考えられていたような時代にあって、今の私たちの想像を超えるような苦しみは彼女にはありました。いや、すでに離縁させられていたかもしれません。この問題で、彼女が、夫にも誰かにも頼れず、彼女自身が密かに、必死に、ためざるをえなかったお金を使って病治そうとしたとルカは言います。医者であったルカは、このような女の悩みを誰より

もよく理解していたのかも知れません。当時は、ロバの糞の中に未消化になった麦があったらそれを身につけると病気が直るとかで、「はいこれがその麦」だと、高額を払ってそんなものを買うようなダマされる女がいることを彼はよく知っていたと思います。必死です。イエス様の身につけていた衣の房(ふさ)に後ろからそっと触れてこれで直るかも知れないと考えた。彼女にとって、それは最後の手段であったでしょう。少し黙想しましょう。

(黙想)

矢内原忠雄は、この女はそのいじらしさにおいて特に私の愛する聖書人物の一人であると言いました。ここで、やはり、ヤイロの娘のことと比較せざるをえないのですが、ヤイロの娘の場合は、父親が、娘に変わって、人々が尊敬し恐れて退いてもらう中で、前から堂々とイエス様に会うことが出来ました。しかし、この女は、群衆の隙をねらって、すべり込むように、イエス様の足もとからでしか願い出ることの出来ませんでした。そして、この女には、会堂司の女性と違って、世間をはばからずには生きていけないという事情が決定的に違いました。

これも、はしょって、やはり比較してしまいましたが、少女の場合は癒した後、誰にも話さないようにと言いますが、この女の場合は、事情が違っていました。死にかけた、いや死んだ娘の癒やし、よみがえりは、その治ったことが明瞭に理解出来ますが、この女の場合、治ったことは、この女でしか分かりません。もし、回りの人々が、夫やその家族も含めて、この女の家族もそうでしょう、この女に、先に話したように、偏見をもって遠ざけたという事実がありそうです。であればこそ、

「あなたの信仰があなたは癒した」というイエス様の言い方は、まるで、イエス様が彼女を癒したのではないとでも、理解されそうな言い方ですが、彼女は、身に患いがあったが、それが、仮にあなたがたの言う、この女に罪があるから、子が産めないのだと考えていたとしても(けっしてそうではないが・・・)、この女の信仰は、それ、このように、病が治ってしまうほどのものだ、言うなれば、この女の社会復帰、この癒やしが、同時に、世間の偏見を取り除く、全的な、生活も体も癒すという癒やしが行われたのだということを示すもののように見えるのです。だから、イエス様は、あえて、誰が触ったのかと彼女自身に自分を明らかにさせ、震える彼女の手をとって、彼女だと手をあげさせるようにして、彼女の信仰だ！と、彼女が一番！彼女の信仰が立派！元夫よ、元夫の家族よ、彼女の出身の家の者たちよ、そういうことだと、あえて公にして、彼女を、ある意味では、彼女の全的な救いをなした瞬間だったことに思いを致したいと思います。

さて、ヤイロの娘の記事を見ましょう。

「8:40 さて、イエスが帰って来られると、群衆は喜んで迎えた。みなイエスを待ちわびていたのである。8:41 すると見よ、ヤイロという人がやって来た。この人は会堂司であった。彼はイエスの足もとにひれ伏して、自分の家に来ていただきたいと懇願した。8:42 彼には十二歳ぐらいの一人娘がいて、死にかけていたのであった。それでイエスが出かけられると、群衆はイエスに押し迫って来た。」

「8:49 イエスがまだ話しておられるとき、会堂司の家から人が来て言った。「お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすことはありません。」8:50 これを聞いて、イエスは答えられた。「恐れなくて、ただ信じなさい。そうすれば、娘は救われます。」8:51 イエスは家に着いたが、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、そしてそ



の子の父と母のほかは、だれも一緒に入ることをお許しにならなかった。

8:52 人々はみな、少女のために泣き悲しんでいた。しかし、イエスは言われた。「泣かなくてよい。死んだのではなく、眠っているのです。」

8:53 人々は、

少女が死んだことを知っていたので、イエスをあざ笑った。8:54 しかし、イエスは少女の手を取って叫ばれた。

「子よ、起きなさい。」8:55 すると少女の霊が戻って、少女はただち

に起き上がった。それでイエスは、その子に食べ物を与えるように命じられた。8:56 両親が驚いていると、イエスは、この出来事をだれにも話さないように命じられた。」

「十二歳ぐらい」とありますが、ルカはその数字よりも、当時、この 12 歳ぐらいというのが、そろそろ結婚のことを考えていく年齢であったことを示しているようにも思います。そして、一人娘。人間的な言葉で言えば、今まで大切に育ててきて、さあ、成人を迎える、何と言いいましょうか、これから花が咲く、親とすれば、その、この子を失うということは、父親が、この子を愛してきた人生の大部分を失

うような悲しみだったことを意味するのかも知れません。しばらく黙想しましょう。

(黙想)

少し注目したいのは、この娘が癒されよみがえられ時、人々の反応を見ると、「8:53 人々は、少女が死んだことを知っていたので、イエスをあざ笑った。」であり、両親でさえも、死んだときは泣いて悲しんだが、癒されると、「8:56 両親が驚いて」とあり、せつかくの感動の場面なのに、喜んだでもなく、喜びの涙を長下でも、抱き合ったでもなく、「8:56 両親が驚い」たと報告されているだけだと言うことです。喜び悲しみという、人の心に寄り添う気持ちより、むしろ、驚きであり、

親としての喜びや、回りの者たちの感激などを超えて、少し強調して言うと、思いが「興味」「関心」のほうに行ってしまうようにも見えます。

当時の常識から言うと成人になっているとは言え、まだ 12 才ぐらい、癒され感謝だとはいえ、世間の評判や関心の的になるには、恥ずかしい年齢です。そんなとき、まるで彼女の姉かだれかのように、イエス様だけが、彼女の気持ちに寄り添い、

「8:56・・イエスは、この出来事をだれにも話さないように命じられた。」あまり、騒ぎ立てないようにと、長血を患った女の場合とはまるで正反対の命令をされたのは、イエス様が、いかに、人の気持ちに寄り添い、気遣っておられるかを明瞭にする一つの例だと思うのです。

さて、今日の箇所、どうであったでしょうか。

先頃、青梅市で牧会をしていた当時、隣の日本基督教団の澤崎という先生と親しく



させていただいており、

81 才で引退するというメールをいただきました。東京に来たときには、暇であるし、先生が引退された千葉から、まだ八王子に行ける体力は残っているの、声をかけて下さいと。そんな先生のメッセージで、印象深いメッセージがあります。ルツ記からのメッセージで、こうありました。ルツは、イエス様であると。

え、ルツは、異境の地の出身、

夫が亡くなって、ナオミという姑(しゅうとめ)と二人旅。ある意味、もうナオミとは縁もゆかりもない存在となった。それでも、ルツは、ナオミを気遣って、あなたといっしょに行くという。S 先生のその、ルツがイエス様だという話の趣旨は、縁もゆかりもないイエス様が、むしろ神の敵であるような罪人の私を見捨てないで、寄り添い着いてきてくれる存在だ、だから、ルツはイエス様の様だということです。

今日の箇所で、私たちが、思うのは、長血を患う女の人生に寄り添い、またその気持ちに寄り添い、また、12 才の娘の環境や、気持ちを想像し寄り添われる姿の素晴らしいさではないでしょうか。

今週の歩み。時の父親のように、いや父親以上にこの娘の父のように、あるいは姉のように、また、あの長血の女の、命がけで彼女を守ろうとする、まるで真の夫のように、またナオミを、今や縁もゆかりもないのに、寄り添おうとする嫁のように、私たちに寄り添われるイエス様に守られ導かれ歩む、この週である事を心から感謝し、いっそう主に感謝し歩むべくここから出てまいりましょう。